「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成 30 年度　家庭科　のまとめ

○　研究大会実践の解説

５年「受け継ぐ味　美味しい味」

○　研究大会の成果・課題を踏まえた実践

５年「めざそう　買い物名人」

実践者　　安　達　聡　子

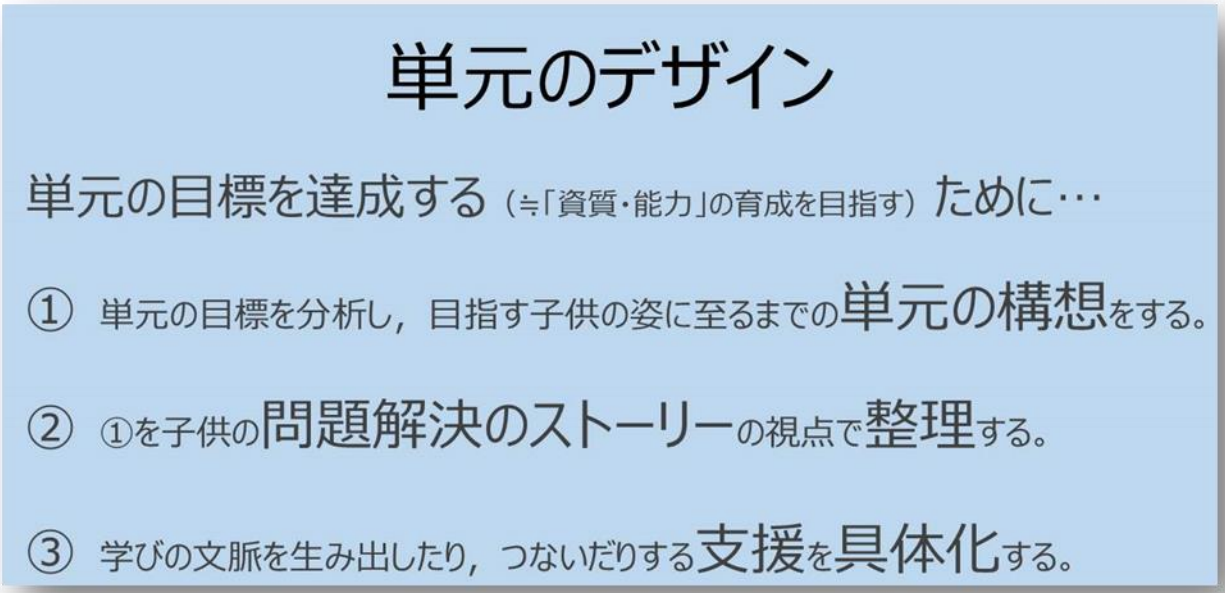
平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度　北海道教育大学附属函館小学校　研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン ～

* 課題設定の理由と研究の経緯　については，「研究のまとめ」を参照して下さい。

1.　「単元のデザイン」とは



まず前提として，授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが，主体的・対話的で深い学びを通して，単元の目標を確実に達成することです。そのための，「単元のデザイン」は，本校では 3 つのステップにより行われています。

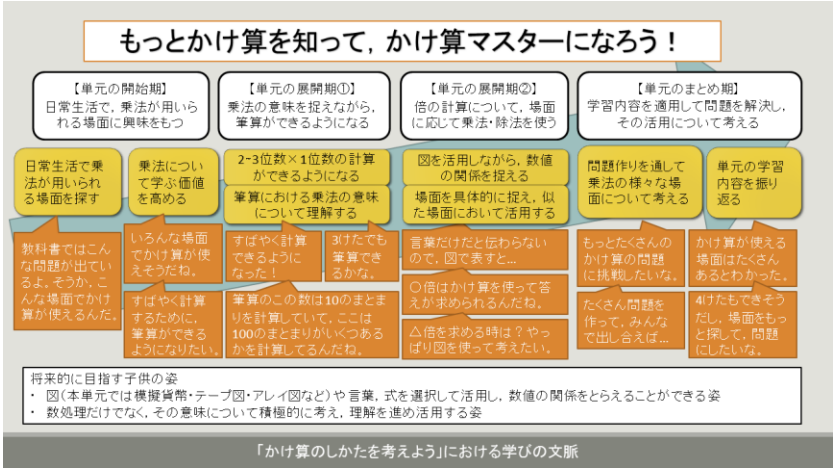
最初は，単元の目標を分析し，目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり，各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して，どのような学びを展開すれば，単元の目標が達成できるのかを考えます。その時，単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し，どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして，単元の構想をすることが，第 1 のステップです。

次は，その学習活動の流れを，子供の問題解決のストーリーの視点で，整理します。先述の通り，主体的・対話的で深い学びを通して，資質・能力を獲得・育成していくには，子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え，単元における問題（課題）を解決することに，必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが，第 2 のステップです。

最後に，「学びの文脈」を生み出したり，つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して，子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには，適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり，間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また，各教科等の特質や単元のもつ特性，児童の実態などにより，その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え，単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが，第 3 のステップです。

2.　単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

> ①　教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
> ②　教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
> ③　現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）
> 中央教育審議会答申（中教審 197 号），p27



「かけ算のしかたを考えよう」における学びの文脈

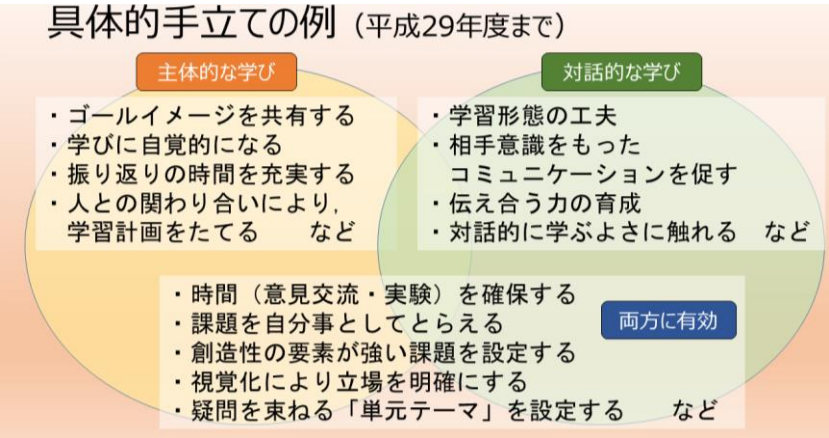
これまでの研究で，資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の 3 つがあるとされています。

これまで本校では，「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は，本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら，その単元で育成を目指す資質・能力が②や③の資質・能力の育成にどのようにかかわり，「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には，単元の学習終了時や，その教科等を学び進めた時，あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし，それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために，指導案上で「学びの文脈」を図化することで，①の資質・能力の育成はもちろん，②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

3.　「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て



今回の研究では，これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを，各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し，単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより，授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み，資質・能力を育成することができるかを，より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは，単元や題材を選びません。また，教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば，「気付きを生む資料と出会う」ことや，気付きから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

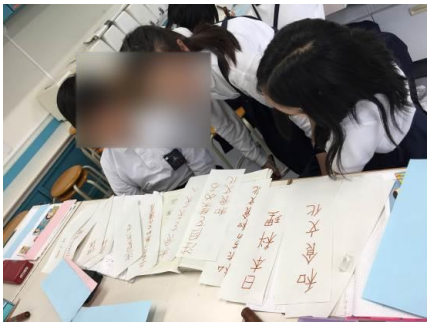
そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては，各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば，「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは，より「深い学び」を実現する手立てとして，活用できると言えます。

家庭科　研究大会実践の解説

題材名　５年「受け継ぐ味　美味しい味」

(1) 題材における，資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本題材の目標	和食のよさや自分たちの生活と和食とのつながりについて考えたり，実践したりすることを通して，伝統的な日常食であるご飯とみそ汁の調理の仕方を理解し，適切にできるようにする。		
	炊飯に関する一連の操作や変化について理解している。 だしの役割や材料の扱い方を理解している。 体に必要な栄養素と主な働きについて理解している。 ご飯とみそ汁を適切に調理することができる。	食事の役割や食事の仕方，調理の仕方など，これまでの学習や生活経験を基に，考えたことを表現したり，活動に生かしたりすることができる。	ご飯とみそ汁の調理に関心をもち，自分たちの生活と食事の役割や適切な調理の仕方いついて，進んで調べたり実践したりしようとしている。
	評価１【個別の知識や技能】	評価２【思考力・判断力・表現力等】	評価３【学びに向かう力，人間性等】

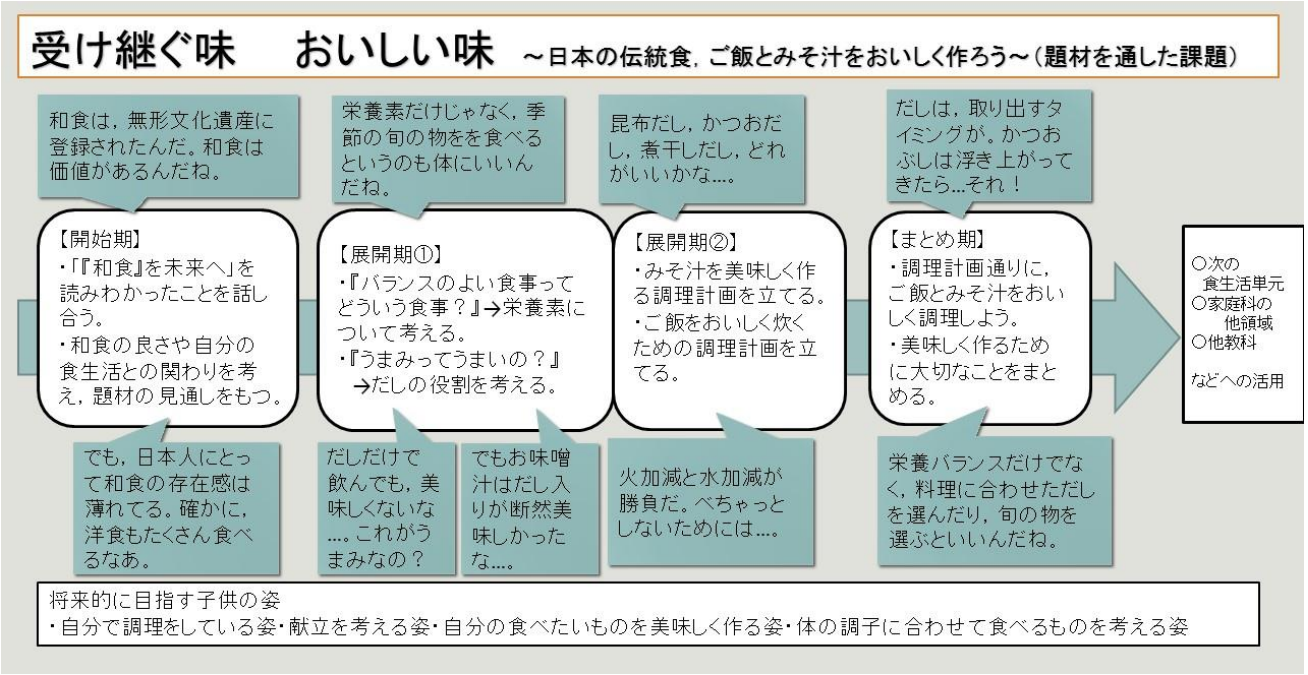


自分たちの周りに広がる世界とその学習がどのようにつながっているかという生活の文脈が，学習意欲を長く持続させるインパクトになると言われています。家庭科では，この生活の文脈が明確になるよう学びの文脈を構成しています。

本題材の目標は上記の通りです。この目標を効果的に身に付け実践していくために，和食を学びの文脈の軸とし，導入に農林水産省の「和食を未来へ」という資料を活用しました。そこから読み取った和食のよさや問題点をもとに，学習の見通しを子供達と一緒に確認していきました。

本題材のゴールは，日本の伝統的な日常食であるご飯とみそ汁を美味しく調理することです。どうすれば美味しく作ることができるのかということに常に目を向けながら，一つ一つの材料の扱い方や手順の意味を見たり聞いたり味わったりするなど，五感を使いながら学んでいきました。（下記の構想図参照）

また，資料から読み取った和食文化を守り継ぐための担い手として自分たち小学生に期待が寄せられていることも学習する必要感を支えるものとなりました。



(2)「学びの文脈」を生み，つなげる具体的手立て

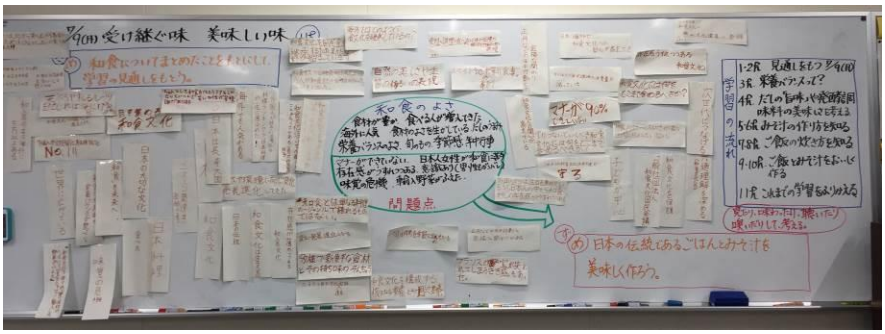
学びの文脈を生み，つなげることができるよう下記の手立てを行いました。

手立て①　多面的に問題を見つめ，課題を明確にしながら学び続けることができる資料提示

子供たちが普段何気なく見ている食生活のことを様々な視点で見つめることができるような資料を提示しました。和食に関する資料や米や味噌の消費量に関するグラフ，試飲するだしやみそ汁，それに使う材料の実物などです。これらの資料を通して，日常の食生活を比べて考えたり，普段何気なく食べているご飯とみそ汁の美味しさの理由について考えたり気付いたりする子供達のが見られました。

本題材の切り口にしたのは，農林水産省の「和食を未来へ」という資料です。資料を読み，和食について自分の考えをまとめる事前学習を設定しました。予め自分の考えをもたせておくことで，これからの学習の見通しをもつことができますし，家庭科の限られた時間で効率よく学習を進められることにもつながります。

このように，和食を授業の中心に据え，和食を通して食生活を見つめることで，子供達は食事の役割や栄養を考えた食事の知識などを学ぶための必要感をもつことができました。また，日本の伝統的な食文化の大切さに気付くことができ，家庭科で学ぶ「食生活」の本質にも迫っていくことができました。



手立て②　体験的な活動を通して，実感をもって言葉で表現し合う学習活動

「なぜそう調理するのか」という課題を子供が解決していくためには，体験を通した学習活動が効果的です。それは，「だから，こうするんだ！」「これはおいしい！」という実感を伴った理解につながるからです。

本題材の体験的な活動の一つに，子供が「だし」の役割について気付き，その重要性について考えたり「うまみ」という日本から生まれた言葉の意味について気付たりすることができるよう，実際に「だし」を味わう活動を設定しました。『①だしのないみそ汁→②だし入りのみそ汁→③だしだけの汁→④再びだし入りのみそ汁』の順で味わっていきました。①②の際には，「だし入りの方がおいしい。」「家のとは違うけど，何のだしなんだろう。」「だし入りは，しょっぱいだけでなく他の味もするね。」と，自然に対話が生まれました。そして，③のだしだけを味わうことで「これがうまみなの？」「甘くもないし，しょっぱくもないし…。」「二つのだしが合わさると味がはっきりするね。」など，感じた言葉を口に出しながら，だしの役割や必要性に気付いていくことができました。

このような学習活動を取り入れることで，一つ一つの材料には役割があり，適切な扱い方があるということに実感をもって気付くことができます。また，「家では何のだしを使っているかな」ど，自ずと家庭生活にも目を向けながら食生活について考えるきっかけにもなりました。

研究大会実践の成果と課題

（１）授業公開後の事後討議の内容

【「学びの文脈」を生み，つなげる具体的な手立て】

手立て①：多面的に問題を見つめ，課題を明確にしながら学び続けることができる資料提示

○　本時では，だしやみそ汁など 12 種類を飲み比べていた。授業が始まる前に，「Ａ：だしなしみそ汁」「Ｂ：だし入りみそ汁」を飲み比べていたが，そこで気付かせたかったことは何か。

→　本時の目標は，だしの役割について考えるということなので，まず，２つを味わうことでだしの存在に気付かせたかった。「Ｂのほうがなんか美味しい。」「だしが入っているからだ。」「だしがあった方が，美味しいね。」そこから，だしのうまみにつなげていこうと考えた。そして，だし→みそ汁と順に味わって，最後は「やっぱり，だしがあったら美味しい。」「だしは，みそ汁を美味しくする。」というところにまとめるためのきっかけとしたかった。

○　「だし」というものを子供達は，どの程度知っていたか。

→　「だし」というものの存在については，知っている。日常生活から得られる知識として，さほど珍しい言葉ではない。事前学習で提示した資料にものっており，題材の導入時に行った和食文化のよさと問題点について交流する場でも，「だしと発酵調味料のうまみ」がよさとしてでている。ただ，「だしがどういうものなのか」までは，分かっていない。本時の子供達の反応がそれを物語っている。それは，本時で学ぶものなので，授業開始時には「だし」というものがあるということを知っているくらいで十分だと考える。

○　ポットを使って，資料であるだしやみそ汁を効率よく提供していたが，温度や濃度などどの子にも同じ味を提供する難しさはあったと思う。他によい方法はないのだろうか。

→　ある。今回は４５分の中で１０種類を味わい，しかも子供達は味わうことに集中することができるように考えたので，予めだしやみそ汁を用意して保護者の手伝いをお願いすることで，４５分で納めるという時間の問題を解決させた。それぞれのだしの取り方を教えながら２コマで行い，できたてを鍋から盛りつけると温度や濃度など，全員に大体均一に提供できると思う。

手立て②：体験的な活動を通して，実感をもって言葉で表現し合う学習活動

○　子供達は，とにかく味わっていろいろな味を感じることができていた。子供達は，飲んで分かったことや感想などを話し合いながら，自分の家庭の味に出合ったり自分の好みに気付いたりする姿が多く見られた。

○　子供達は，言葉や○×のリアクションで自分の考えを伝え合うことで，それぞれの味覚の違いに気付いていった。視点を変えて，「○○ちゃんは，～～と言っていて，よく味わっていみたら～～な味もした。」など，人の考えを語り合うという交流があっても効果的だと思った。

○　５種類のだしを飲み比べて「うまみはうまくない」という考えの中にも，「でも一番美味しいと思ったのはかつおだし。」「わかるわかる。においが一番いいよね。」というように，子供達は自分の味覚や嗅覚と向き合い，仲間の感想を聞いては再び味わって確かめるという姿が見られた。手立て①ともかかわるが，だしを飲み比べるという活動には，子供達にとって近くにいる参会者に思わず話しかけてしまうほどの衝撃があった。

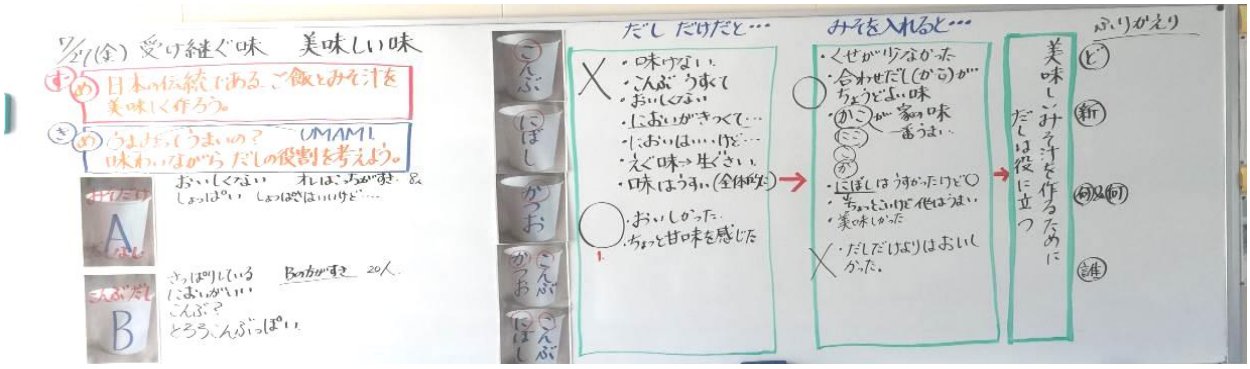
○　だしを飲み比べた後，５種類のみそ汁を飲んだ子供達は，「あ～美味しい。」「みそパワーだ。」と，言っていた。「うまみはうまくない」から，「うまみは，みそを入れると劇的にうまくなる。」にどう逆転させるか，教師の言葉がけが鍵になる。「みそを入れるとうまくなる。でも，みそだけではだめ。」という言葉を子供から引き出すために，最初のＡＢの飲み比べに立ち戻ると，子供の思考はよりスッキリとゴールに向かったのではないか。

○　だしだと「うまみはうまい」１名「うまくない」２７名，みそ汁にすると「うまみはうまい」２７名，「うまくない」１名という大逆転の結果が，数字だけでなく，文字の大きさで表現するなど，大げさな板書の工夫があると，もっと子供達は実感をもって自信をもって結論をだすことができたと思う。（ユニバーサルの視点が落ちていました。失敗失敗･･･）

【その他】

○　食は，個人の味覚の違いや家庭環境による食の経験の違いが大きいところだが，そういう児童に対して言葉がけなど，どのような配慮をすればよいか困ることがある。実際にどのようにしているか教えて欲しい。

→　食に限らず，家庭科は生活経験の違いがつきものである。家庭科の学習を始める段階で「家庭によってよりよい方法は違うこと」「違いを受け入れること，楽しむことで，自分にとってのよりよい方法に出合える。」というのを伝えている。本時の中では，「味覚の感じ方は一人一人違うから，人と違っても不安になる必要はない。」というのを伝えている。また，「家はカップに入ったみそ汁の時がある。」という子供がいたが，「そういうときもあるよね。今日飲んだみそ汁はどうだった？」という言葉がけをした。子供達が「初めて飲んだけど美味しかった。」「こういうのもいいな。」など，自分の生活の中の選択肢を増やしていけるような雰囲気をつくることを心がけている。



（２）事後討議を受けて見えてきた成果と課題

研究主題に迫るために家庭科では，どの題材においても「①多面的に問題を見つめ，課題を明確にしながら学び続けることができる資料提示」，「②体験的な活動を通して，実感をもって言葉で表現し合う学習活動」の２つを主な手立てとして実践を進めています。

本題材では，指導要領におけるＢ衣食住の内容に，生活文化の要素を重視して題材を構成しています。学びの文脈の軸にしたのは和食文化です。資料として活用したのは，「和食を未来へ（冊子）」，米の消費量のグラフ，だしとみそ汁（飲み比べ），米，ご飯（食べ比べ），材料の実物などです。

上記の資料は，子供達が学習のゴールイメージをもち，そこに至るまでの「なぜ～なのだろう」「どうやったらできるのだろう」という疑問や問題を引き出すきっかけとしてよい働きをしてくれました。「なぜそれを学ぶのか」ということの説得力や，「なぜそうするのか」という学びの原動力につながるからです。ただ，何をどのように提示するかについては，吟味が必要であるのは間違いありません。本時については，当初は昆布だしとそのみそ汁のみの予定でした。指導案検討により，５種類のだしとそのみそ汁に変更し，本時を行いました。子供が実感をもって理解するには，ある程度のインパクトとダイナミックさが必要であるということを授業者も実感をもって理解できました。（この場合のある程度とは，授業者にとって無理なく準備ができる程度ということです。）

手立て②については，本題材を構成し実践するにあたり，特にこだわりをもって取り組んだところです。参考にしたフランスの「味覚を目覚めさせる授業」のガイドブック（※）で，著者が「言葉がないと味覚がなく，味覚がないと言葉もない」と述べています。確かに，思考も理解も全て言葉です。子供達がだしの役割を理解するためには，あえて旨味を言葉で表現したり，美味しいご飯とみそ汁を作るために飲み比べや食べ比べをして食べ心地を表現したりすることが必要であると考えています。子供達がそれぞれに自分の言葉で，気付きや理解したことを話すことができるためには，授業者も子供もゴールイメージからぶれないことが大前提です。そして何より，子供達から言葉を引き出す授業者の対話の技術が必要だということを痛切に感じます。

（※）参考文献「子供の味覚を育てる　ピュイゼメソッドのすべて」ジャック・ピュイゼ著

研究大会の時に配付した当日資料を掲載します。

「受け継ぐ味　美味しい味」当日資料

私の「ずっとめあて」・・・

子供には，題材を通して解決していく課題を「ずっとめあて」，一単位時間で解決したり考えたりする必要があるめあてを「きっと今日めあて」（きっと今日達成できるめあて）と名付けています。私の近年の家庭科の「ずっとめあて」について明らかにしながら，今日の授業に至るまでについて書いていきます。

①　クラシ　タノシ　ダイスキ…　（暮らしの楽しさ，自分の周りの社会とのつながりに気付いてほしい！）

家庭科の学習は，他教科や各教育活動だけでなく，子供たちの家庭生活はもちろんのこと，その先にある社会ともつながっています。子供たちは日常，他教科と家庭科のつながりをあまり意識していませんが，理科の沸騰，社会科の農業，算数科のグラフ，国語科の言語活動そのものなどを想起することで，つながりを意識します。そこで，子供に「学んだことは自分の生活と直結している」ということを伝えていくことで，どの教科においても「学ぶこと」に生活や将来のことに役立つという価値を見いだして，より学びに主体的になっていくのではと考えています。ですから，私は家庭科の学習を通して，自分の周りに広がる社会，そして世界とつながっていることに子供達が気付いていけるようにするためにどんなことができるか考えています。そして，それに気付くことで子供は，自分の家庭生活に興味・関心をもつことができますし，今求められている力の１つである実践力の向上につながっていくと考えています。学びの文脈を子供と作るためには，生活の文脈まで見据え，それを大切にしながら授業をつくっています。

②　ワショクモ　ミカクモ　ミリョクテキ…（和食文化のすばらしさを伝え，継承させたい！）

「食」を扱う題材において，私はあえて意欲付けをする必要はないと考えています。なぜなら「食」自体がすでに魅力的だからです。ですから，尚のこと「作りたいね」「食べたいね」「美味しいね」「あ～楽しかった」という本来もっている意欲だけで「なんだか楽しかった」的な活動の楽しさだけで終わらないような授業をつくりたいと考えてきました。（それはきっとみなさん同じだと思いますが…。）今回は，「ユネスコ無形文化遺産」に登録されているフランスの食文化を継承する取組であり，「味覚の強化週間」にフランス全土の小学校で実践されている「味覚を目覚めさせる授業」を参考にして題材を計画しました。もちろん，時間には限りがありますからほんの少しです。扱う味覚は，日本特有の味覚である「旨味」です。それを言葉で表現するのはきっと難しいと思います。それでも，「匂いは？」「飲んだ時の口の中は？」「飲んだ時の心の中は？」など，様々な視点で旨味について考えることで，和食文化の特徴の一つである，「だし」の役割を実感をもって理解できるようにしたいと考えました。

③　デモ…ジスウ　スクナイナ…（子供たちに考えたり体験させたりする時間を増やしたい！）

皆さんも考えたことはありませんか？いつも年間を通して，学習の計画を立てたり，子供の意欲が高く，「もっとやりたい。」「先生，家庭科の時間，増やせないの？」という子供の姿を見たりするにつけ，いつも私がつぶやく言葉です。しかし，現在の家庭科の時数が定められてちょうど今年で２０年を迎えますが，きっと変わらないでしょう。嘆いても仕方がないので，思い切ってやってみようと思ったことが，題材に入る前に，関連する資料を配付したり，テーマを与えて自分で調べさせたりする事前学習です。少ない時数の中で，これを行うことで，生活経験や個人の知識量の差を少しでも埋めた状態で授業に入ることができます。（子供たちも思った以上に熱心にやってくれます。）

本題材で渡した資料は，農林水産省の「和食を未来へ」です。この資料には和食文化の特徴や，日本における和食の存在感の薄まり，外国からの和食への注目など，子供たちが何となく知っていることや，日本人なのに知らないこと，食生活を見つめ直すヒントが詰まっています。この資料を事前に学習することで，私が長年授業化したかった②のことや，時数の少なさへのジレンマなどを解消しながら授業を展開できると考えました。

また，授業記録に書いていますが，子供と一緒に学習計画を立て，それに即してやることで，教師だけではなく，子供も時数や一単位時間の見通しをもって，「今日はここまでやらなきゃ。」「あ，あと１０分しかない。」など時間を大切にしながら学んでいくようになりました。もちろん「あと５分だよ！」「時間もったいないから，分担くらいすぐ決めなさい！」という私の指導が入ることもありますが…。

また，①にも書きましたが，家庭科の学習は，実に様々な教科や教育活動とつながっています。各教科で培った力を活用させながら学習に臨ませることも，時数を無駄にしないことだと思います。家庭科を深く学ぶようになり，より各教科で子供にしっかり力を付けることの大切さを改めて実感しています。

実践提案「生活の文脈を明確にする学びの文脈」

指導案を掲載します。

題材名　５年「めざそう　買い物名人」（６時間扱い）

1.　家庭科の目標，見方・考え方，本単元の目標，育成を目指す資質・能力を踏まえた題材の評価規準

<table>
<tr><td rowspan="5">家庭科の目標</td><td colspan="3">生活の営みに係る見方・考え方を働かせ，衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して，生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</td></tr>
<tr><td colspan="3">生活の営みに係る見方・考え方</td></tr>
<tr><td colspan="3">家族や家庭，衣食住，消費や環境などに係わる生活事象を，協力・協働，健康・快適・安全，生活文化の継承・創造，持続可能な社会の構築等の視点で捉え，よりよい生活を営むために工夫すること</td></tr>
<tr><td>個別の知識や技能</td><td>思考力・判断力・表現力等</td><td>学びに向かう力，人間性等</td></tr>
<tr><td>家族や家庭，衣食住，消費や環境などについて，日常生活に必要な基礎的な理解を図るとともに，それらに係る技能を身に付けるようにする。</td><td>日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し，様々な解決方法を考え，実践を評価・改善し，考えたことを表現するなど，課題を解決する力を養う。</td><td>家庭生活を大切にする心情を育み，家庭や地域の人々との関わりを考え，家族の一員として，生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">本題材の目標</td><td colspan="3">身近な生活における消費の学習を通して物やお金の大切さに気付き，目的に合った物の選び方や環境に配慮した選び方について考えることができるようにする。</td></tr>
<tr><td>購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方や買い方をすることができる。
目的や品質などの家庭生活をよりよくするための物の選び方や適切な買い方や，環境に配慮することの必要性について理解している。</td><td>家庭生活をよりよくするために，金銭の計画的な使い方を考えたり，品質や価格などの情報を活用し目的に合った選び方や買い方の工夫について考えたりしている。</td><td>自分の生活を見つめ，物やお金の使い方に関心をもち，物や金銭の大切さに気付き，適切に買い物をしようとしている。</td></tr>
<tr><td>評価１</td><td>評価２</td><td>評価３</td></tr>
</table>

2.　題材設定について　　〈内容関連〉Ｄ身近な消費生活と環境（１）アイ

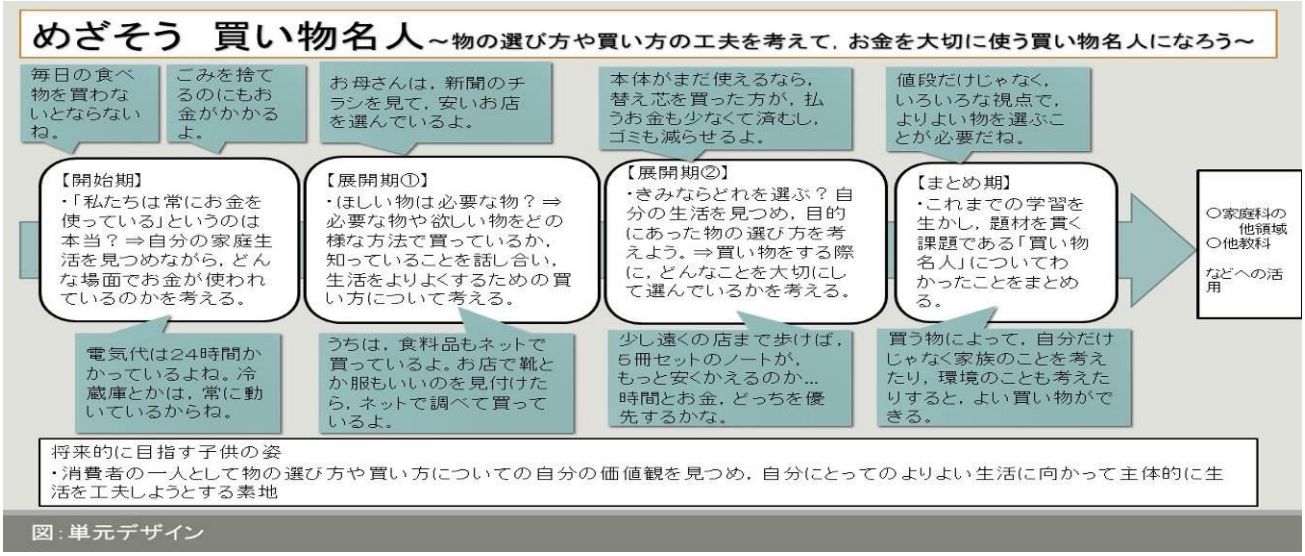
本題材では，身近な生活における消費と環境の学習を通して，物や金銭の使い方への関心を高め，環境に配慮することの大切さに気付くとともに，物の選択，購入及び活用に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け，身近な消費生活や環境をよりよくしようとする工夫する能力と実践的な態度を育てることをねらいとしている。

子供達の家庭生活における消費との関わりは，距離感がある様子がうかがえる。お遣い経験はあるが，自分でこつこつ小遣いを貯めて欲しい物を買うというよりは，誕生日やクリスマスなど家族の行事や，必要に応じて学習や習い事で必要な物や欲しい物を買ってもらうという家庭が多い。金銭の使い方は，家庭によって様々である。本題材では，いずれ自立して自分の生活を築くであろう子供達が，限りある金銭を有効に使うことができるよう，物の選び方や買い方に対する価値観には様々な視点があることや，目的や自分の状況によって選び方や買い方が変わるということにも気付かせていきたい。また，消費生活は，社会や環境とも繋がっている。様々な商品表示についても学びながら，物を選ぶ際の手段として活用できるようにしていきたい。そのことによって，　環境に配慮した生活の大切さにも気付くことができると考える。そのために，身近な物を購入する際の選び方や買い方について考える等の実践的な活動を取り入れることや，様々な視点をもって考えることができる課題を設定するなど，題材構想を工夫する。そして，物の選び方や買い方に対する自分の価値観を見つめ直し，明確にしていくことができるようにしていきたい。

題材の後半には，ＩＣＴを活用し，味噌を選ぶという実践的な学習活動を位置付ける。実際に店頭で商品を選ぶ雰囲気や，何十種類もの味噌の中から何をどの様に選ぶのか，これまでの学びを生かしながら選択できるようにしたい。消費経験が少ない子供達だからこそ，実践的な活動を積み重ねることで，消費者の一人として物の選び方や買い方についての自分の価値観を見つめ，自分にとってのよりよい生活に向かって主体的に生活を工夫しようとする素地を育てたい。

3.　研究との関わり

(1)　題材における，資質・能力の育成を支える「学びの文脈」



図：単元デザイン

(2)　「学びの文脈」を生み，つなげる具体的な手立て

手立て①　多面的に問題を見つめ，課題を明確にしながら学び続けることができる資料提示

子供達が，学習に対する意欲を高め，主体的に学んでいくためには「何を学ぶのか・何のために学ぶのか」を見通すことができるような話題提供や資料提示の工夫し，題材を貫く課題設定を丁寧に行うことが必要である。

今回は，題材の導入に日常生活での金銭の使い道に気付くことができるイラストを提示し「私たちは常にお金を使い続けているというのは本当か」という，疑問を子供たちに投げかける。そうすることで子供たちは自分の生活の目に見える金銭の使われ方や，目に見えない金銭の使われ方になど，何気なく行っている消費活動に目を向けることができると考える。24 時間金銭を使い続けながら生活していることや金銭には限りがあるという現実に気付くことが，学習の必要感となり，学びの文脈の軸となる。

他にも本題材では，商品情報や実物，商品表示など様々な資料を提示する。そのことによって，一つの物を選ぶ際に値段や量，質など多くの視点をもって選んでいることに気付かせたい。

このように，どの場面でどの資料を提示するかを工夫することで，子供は常に学ぶ目的からぶれることなく主体的に学び続けていくと考える。

手立て②　体験的な活動を通して，実感をもって言葉で表現し合う学習活動

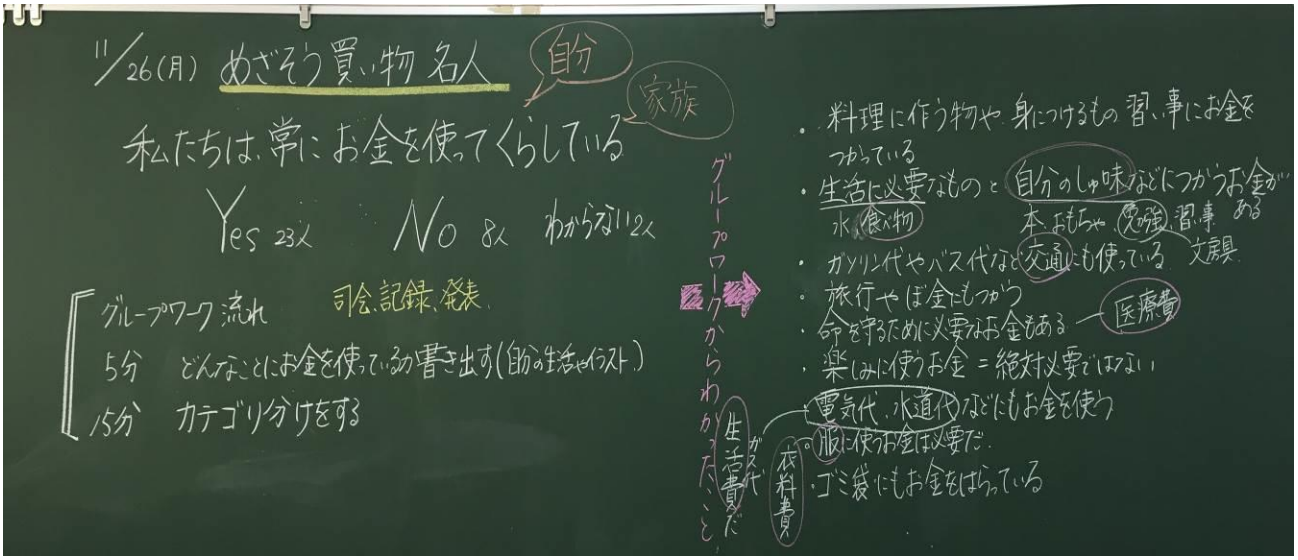
子供達にとって身近な物を使って買い物シミュレーションで物を選ぶ活動を 3 回設定する。この 3 回のシミュレーションでは，値段やなぜそれを買う必要があるのかなど場面設定を具体的に提示することで，根拠を明確にして選択することができるようにしたい。その際，できるだけ日常場面に近づくよう，実物やＩＣＴを活用した教材を活用し，多様な選択肢を用意する。このような活動を積み重ねる中で，多くの情報を手がかりに目的に合ったものを選択することができるようにしたい。

また，活動の中で必要に応じて友達と交流したり，それぞれの選択とその根拠について全体で話し合ったりする場面を設定する。そのことにより「やっぱり最後までちゃんと使いたいから，少し高いけど書き心地のよいこっちのボールペンにしよう。」と自分の判断に自信をもったり，「安いのがいいと思っていたけれど，環境にいい物を選ぶという考えもあるんだな」など，物を選ぶ際の価値観は人それぞれに違いがあり，選ぶ視点も実に多様であるということにも気付いたりすることにつながると考える。

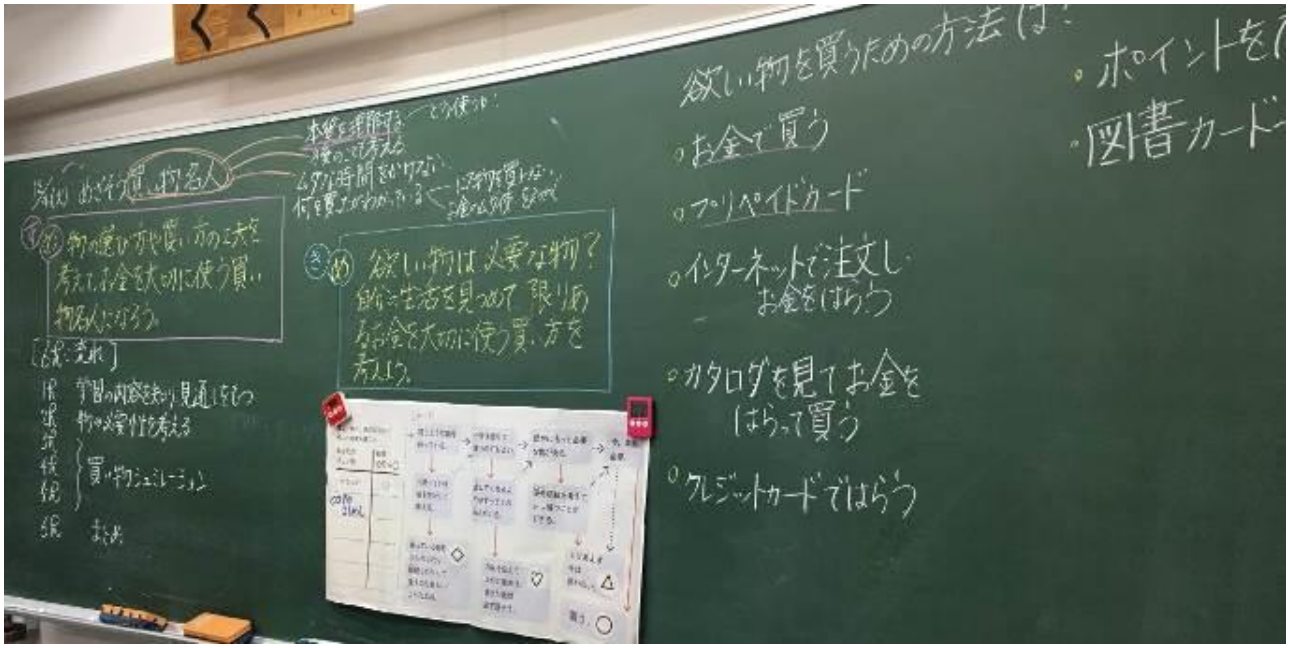
買い物シミュレーションを行うにあたり，ワークシートを活用する。ワークシートをノートに貼り，自分の学びを振り返りながら学習を重ねることで，「何を買うか」「どこで買うか」「だれのために買うか」によって，選び方が変わるということや自分の意思決定の根拠をより明確にすることができると考える。

(3)　「学びの文脈」を重視した題材計画

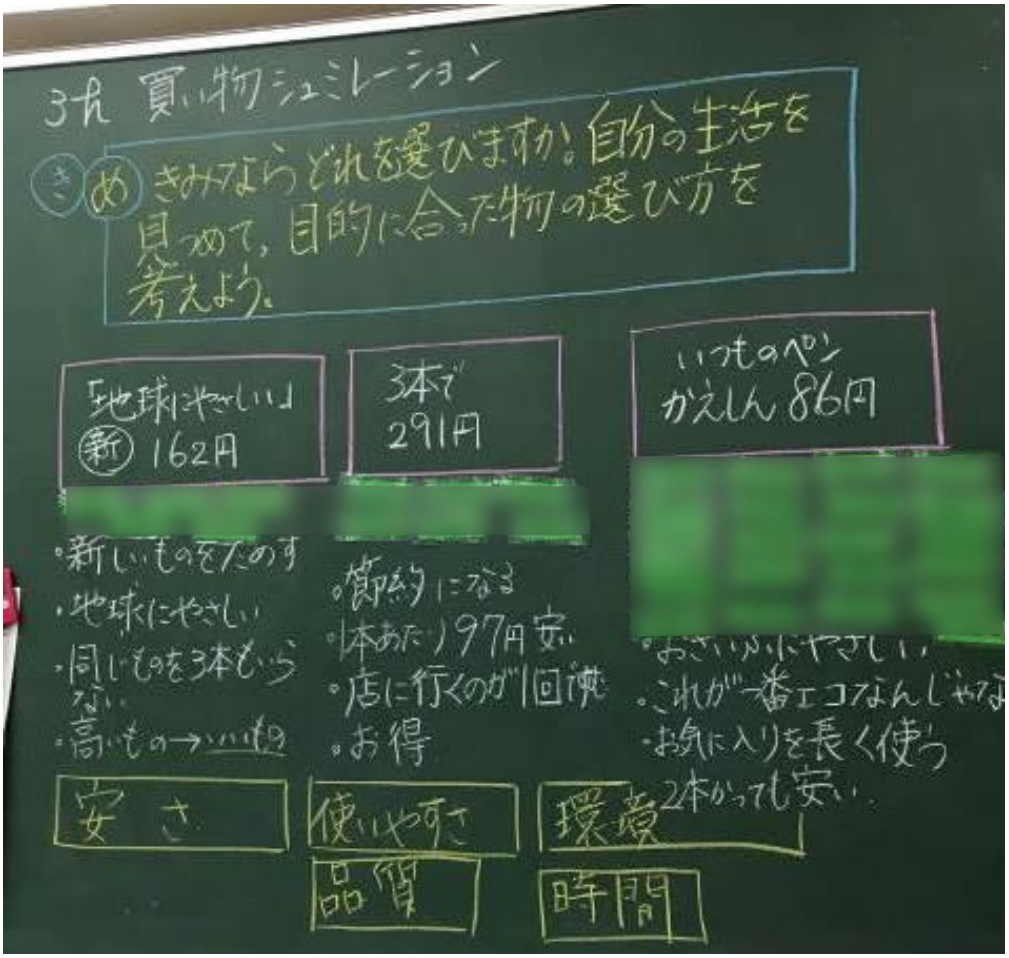
	学習活動（○）と子供の姿	教師の支援（☆）と評価（◇）
開始期（1時間目）	○　これからの学習の見通しをもつ。 「私たちは常にお金を使っている」というのは本当？ お金がないとごはんが食べられないよ 水や電気もお金がかかるよ ○　自分の家庭生活を見つめながら，どんな場面でお金が使われているのかを考える。 車のガソリンもお金で買っているよ 病院や床屋でもお金を使っているね 形のないものにもお金を使っているんだね ○　題材名「買い物名人」のイメージを話し合う。 無駄な物は買わない いい物を安く買う ○　これからの学習の流れを確認し見通しをもつ 物の選び方や買い方の工夫を考えて，お金を大切に使う買い物名人になろう。	☆　これからの学習への見通しをもつことができるような発問を工夫する。 ◇　お金の使い方に関心をもち，自分の生活の中でどのようにお金が使われているかを進んで考えている。 評３ ☆　形あるものだけでなく，形のない物に対する消費活動にも目を向けることができるよう，教科書のイラストや日常生活を手がかりとし，お金が使われている場面を付箋に書き込み KJ 法を活用する。 ☆　お金の大切さに気付くことができるよう，どのようにして収入を得ているのかに目を向けるような言葉がけをする。 ◇　お金の大切さに気付き，限りあるものや金銭の有効な使い方について理解している。 評１ ☆　これからの学習の見通しを明確にすることができるよう，大まかな流れを全体で確認する。

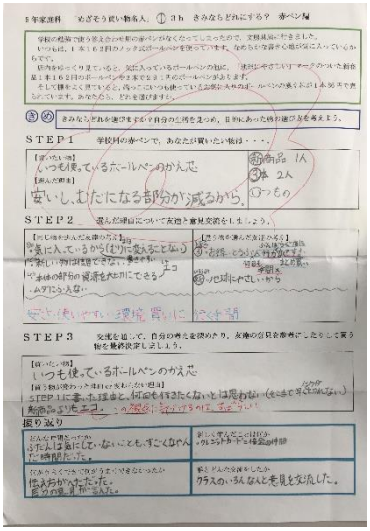


展開期①（2時間目）	欲しい物は必要な物？ 自分の生活を見つめて，限りあるお金を大切に使う買い方を考えよう。 ○　欲しい物をリストアップし，買う必要性について話し合う。 欲しい本が 3 冊あるんだ。 買わなくても，図書館や友達から借りたらどうかな。 本は，ゆっくり読みたいよね。買ったら，何回も繰り返し読めるしね。本は，買ってもいいんじゃないかな。 ○　必要な物や欲しい物をどの様な方法で買っているか，知っていることを話し合い，生活をよりよくするための買い方について考える。 ぼくは，お金で買っているけど，お母さんはカードを使っているよ。 図書カードや文具券は，私たちでも使うことができるね。 何となく買っていると思っていたけど，お金の払い方や包装の仕方等，いろんなことを決めて買っているんだね。 ○　本時の学びを振り返る。	☆　前時に話し合った「買い物名人」のイメージを切り口に，本時の学習内容にせまる話題提起をする。 ◇　欲しい物の必要性について，自分の生活を見つめたり交流したりすることを通して，物や金銭の大切さについて考えながら適切に買い物をしようとしている。評３ ☆　欲しい物と本当に必要な物との違いに気付くことができるよう，Yes・No チャートを活用し欲しい物に対する考えを整理する活動を位置付ける。 ☆　買い物に対する多様な価値観に触れることができるよう，全体で交流する場を設ける。 ◇　物の買い方には様々な方法があることや，買い方のよさや注意点，環境に配慮することの必要性について理解している。評１ ☆　適切な買い方について理解することができるよう，資料を活用しながら様々な買い方のメリットデメリットに目を向けて考えるよう促す。 ☆　「買い物の仕組みや消費者の役割について理解することができるよう，具体例を出しながら子供と対話をする。 ☆　様々な視点をもち，自分に合った物の選び方に気付いたり，これからの学習に向けて本時の活動を振り返ったりする場を設ける。

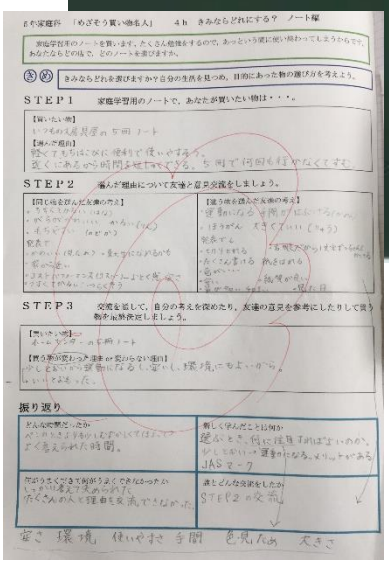


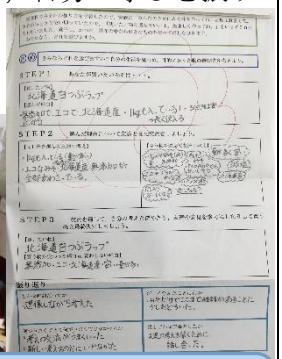
展開期②（3時間目）	○　資料を読み，本時の見通しをもつ。 きみならどれにする？①　【赤ペン編】 きみならどれを選びますか？自分の生活を見つめ，目的にあった物の選び方を考えよう。 ○　資料をもとに，どのボールペンを選ぶか，またなぜそれを選ぶのかを考える。 私は，今まで使っていたものの替え芯にする。 私はいろいろ使ってみたいから，新商品にする。 本体がまだ使えるなら，替え芯を買った方が，払うお金も少なくて済むし，ゴミも減らせるよ。 もしかしたらもっと使いやすいのに出会えるかもしれない。地球にやさしいマークもついているしね。 ○　考えを交流する。 ○　買い物をする際に，どんなことを大切にして選んでいるかを考える。 安さが一番 地球に優しい 使い心地 新商品 ○　本時の自分の学びを振り返る。	☆　学習や家庭生活への意欲を高めることができるよう，消費者の視点をもちながら物を選ぶという課題を設定する。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方をしている。 評１ ☆　子供たちが多様な考えから自分の考えを明確にすることができるよう，ワークシートを活用する。 ☆　選択した根拠を明確にすることができるよう，必要に応じて選ぶ視点に関する言葉がけや，選択肢のメリットやデメリットに目を向けて考えるよう促す。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方の工夫について考えている。 評２ ☆　様々な視点をもち，自分に合った物の選び方に気付いたり，これからの学習に向けて本時の活動を振り返ったりする場を設ける。





展開期②（4時間目）	○　資料を読み，本時の見通しをもつ。 きみならどれにする？②【ノート編】 きみならどれを選びますか？自分の生活を見つめ，目的にあった物の選び方を考えよう。 ○　資料をもとに，どの店でどのノートを選ぶか，またなぜそうするのかを考える。 僕は，一番お得な５冊セットにする。ノートは毎日使うからたくさん必要。 少し高いけど，このノートにする。いいノートは，丁寧に書きたくなるからね。 少し遠くの店まで歩けば，５冊セットのノートが，もっと安くかえるのか…時間とお金，どっちを優先するかな。 ○　考えを交流する。 ○　買い物をする際に，どんなことを大切にして選んでいるかを考える。 近いお店で時間をかけないで買う。 少し高いけど，地球に優しい物を買う。 ○　本時の自分の学びを振り返る。	☆　前時の学習から，少し視野を広めて考えることができるような課題を設定する。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方をしている。 評１ ☆　前時の学習を基に，「どこで買うか」ということにも触れて考えさせることで，お金だけでなく時間の使い方にも目を向けることができるようにする。 ☆　子供たちが自分の考えを明確にすることができるよう，ワークシートを活用する。 ☆　根拠を明確にすることができるよう，選ぶ視点に関する言葉がけや選択肢のメリットやデメリットに目を向けて考えるよう促す。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方の工夫について考えている。 評２ ☆　様々な視点をもち，自分に合った物の選び方に気付いたり，これからの学習に向けて自分の学びを振り返ったりする場を設ける。



展開期②（5時間目）	○　資料を基に，本時の見通しをもつ。 きみならどれにする？～応用～【みそ編】 きみならどれを選びますか？これまでの学習を生かし，目的にあったみそを選びましょう。 ○　資料とみその商品情報を基に，どのみそを選び，なぜそれを選ぶのかを考える。 自分でだしをひくから，だし入りみそは必要ないな。 無添加がいいな。家族のために体にいい物にしよう。 ○　考えを交流し，自分の考えを見つめ直す。 やっぱり食べるものだから，何で作られているかは大事だね。 無添加と書いてないのに無添加と同じ物があるのか。少し安くていいかも。 ○　本時の自分の学びを振り返る。  函館市小学校家庭科教育研究会の取組も兼ねて授業を公開しました。北海道教育大学札幌校教授佐々木貴子先生の監修により，４年吉田宙史さんが制作したＩＣＴ教材を活用して行いました。 	☆　これまでの学習を生かし，様々な情報を活用しながら，考えることができるような課題を設定する。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方をしている。 評１ ☆　これまでの学習を生かして，より多くの商品情報から買う物を選ぶことができるよう，ＩＣＴ教材を活用する。 ◇　購入しようとする物の品質や価格などの情報を活用し，目的に合った選び方の工夫について考えている。 評２ ☆　様々な視点をもち，自分の学びを振り返る場を設ける。
まとめ期（6時間目）	○　本時の見通しをもつ。 物の選び方や買い方の工夫を考えて，お金を大切に使う買い物名人になろう。 ○　これまでの学習を生かし，題材を貫く課題である「買い物名人」についてわかったことをまとめる。 値段だけじゃなく，いろいろな視点で，よりよい物を選ぶことが必要だね。 買う物によって，自分だけじゃなく家族のことを考えたり，環境のことも考えたりすると，よい買い物ができる。 ○　これまでの学習から，わかったことや自分の成長について振り返る。	☆　学習を通して自分たちの成長に気付くことができるよう，題材導入時に「買い物名人」のイメージをまとめた板書を提示する。 ◇　家庭生活をよりよくするための物の選び方や適切な買い方，環境に配慮することの必要性について理解している。 評１ ☆　自分の言葉でまとめられるよう，ワークシートなどにも目を向けるなど必要に応じて言葉がけをする。 ◇　学習したことをこれからの生活に生かそうとしている。 評３ ☆　これからの生活に生かすことができることや自分の成長に気付くことができるよう，振り返る場を設定する。

今年度の研究を通して

長年にわたり，家庭科に携わってきて，今自分が考えていることを記します。

（1）　家庭科の学びによって児童に身につく力

家庭科は，主要教科に比べて大きくクローズアップされづらい教科と言えますが，実際は，人が生きていく上で必要不可欠な力を育むことができます。例えば次のような力です。もちろん，これらの力がさらに，様々な生活の場面において，細分化され発揮されていきます。

○　問題解決力	○　意思決定の力	○　創造力	○　実践力	○　暮らしを楽しむ力
○　情報収集する力	○　考察力	○　己を知る力	○　タイムマネジメントする力	
○　オープンマインド	○　あそびごころ（力ではありませんが，個人的に必要だと思います。）			

（2）　家庭科の学習はどのようにあるべきか

○　<u>生活の文脈</u>を実感することができる題材構成

家庭科の学習は，各教育活動だけでなく子供達の家庭生活はもちろんのこと，その先にある社会ともつながっています。子供達は，他教科と家庭科との繋がりを自分から意識することは少ないです。例えば，理科の沸騰，社会科の農業，算数科のグラフ，国語科の言語活動などとのつながりに気付くことで，自ら繋がりを意識しはじめます。題材における学びの文脈や他教科との繋がりももちろん大事ですが，自分たちの周りに広がる世界とその学習がどのように繋がっているかという生活の文脈が，よりよい生活を工夫する実践意欲を長く持続させるインパクトになると考えます。

○　<u>学校だからできる</u>学習活動を考えて授業を展開

単に料理を作ったり布で小物を作ったり，散らかっていることを片付けたりするのであれば，家庭でもできます。これらを含む生活に関わる事象をあえて学校で学ぶという意味を考えると，「よい学習習慣とよい生活習慣を身に付ける」という，学校の役割に繋がっていきます。子供達の衣食住に関わる経験知や価値観は，家庭環境によって大きな差があります。子供達が，自分の家庭やよその家庭の価値観，衣食住に関する世の中の流れ，自分の理想などを見渡して「じゃあ，自分はこうしたい」「こうなりたい」と意思をもって学び，生活につなげられるような経験ができる学習活動が必要です。

例えば，「急須でお茶を入れて，茶葉の量や湯の温度を試しながら，自分好みの苦くないお茶をいれたい。」「自分が好きな豆腐と長ネギシャキシャキのみそ汁を鰹だしで作りたい。」「ご飯が炊けるまで，炊飯器の中ではどんなことが起こっているのか確かめたい。」「手縫いは苦手だけど，ミシンだと自分でもつくれるわ～。」「洗濯って本当に必要なの？安い服何日か着て使い捨てにした方がお財布にも環境にもいいんじゃないの？確かめようよ。」「うまみってうまいの？（今年度の研究大会です）」「夏を涼しく過ごすための工夫，お財布にも地球にも優しい方法を仮説を立てて効果を検証しよう。一番効果的なのは？」などが考えられます。

家庭生活の中には，分かっているようでわかっていないことが意外とあります。それを，問題解決の手順を踏みながら時間を確保して取り組むことが大切です。

（３）　成果ある学びを目指す具体的授業像

衣食住に関することを学ぶ家庭科は，あえて子供達に学習に対する意欲付けをする必要はないと考えています。なぜなら，自分が考えたことを基にして作ったり味わったり，試したりする家庭科そのものが子供達にとって魅力的だからです。だから尚のこと，「なんだか楽しかった」的な活動の楽しさだけで終わらないような授業をつくりたいと考えて授業をしています。

例えば……

○　事前学習（資料を読みまとめる，テーマについて調べる，これから学習することについて家庭での様子を調べまとめるなど）の取組と，それを活用しながら授業を展開する題材構成

○　学習内容と家庭生活及び社会との関わりが分かるような，資料を活用（グラフ，写真，記事など→説得力が増す）し，「なぜ学ぶのか」「なぜこのように学ぶのか」という目的意識の共通理解

○　試したこと，作ったこと，味わったことなどの体験から，何を学んだのかを自分の言葉で結論づけ，活動から学びへと転換させる場を位置付ける場の設定

○　学習を通して，問題解決の手法を身に付けることができるような授業展開

○　本時の学習と学習者としての自分を客観的に見つめられるような振り返り（視点４つ）

①　どんな時間だったか

②　新しく学んだ事は何か

③　何がうまくできて，何がうまくできなかったか

④　誰とどんな交流をしたか

（４）　家庭科研究の推進と取組を進めたい内容

来たるべき（もう来ていますが）少子高齢化社会の進展に向けて，幼児や高齢者などの異なる世代の人々との関わりに関する内容について教材化し，子供に学ばせることで，子供が身近で味わうことができない体験をさせ，「社会貢献」という視点で「誰かのために何かをやってみる」という力を付けさせる必要性を強く実感しています。（人口や社会貢献に関するグラフなどの資料活用，今の自分にできることの洗い出し，実践→幼児との交流や老人ホーム訪問など）さらに，日本ならではの，衣食住に関する文化を，未来永劫つないでいく必要性を強く感じています。ですから，我が国の生活文化と絡めた各内容の題材構成をどうつくるかを常にもやもやと考えています。

最後に，家庭科の全題材を貫くテーマとして，「持続可能な社会の構築」に目を向けた題材の構成がこれからの時代には最も重要です。持続可能な社会なしに私たちの生活がよりよくなることは，ありえないからです。ただ，題材の構成や教材化というよりも，もっと大きな視点として，常に「持続可能な社会の構築」が生活の文脈として全題材の根底に流れていると考えます。